

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	雑報
Author(s)	
Citation	龍南會雜誌, 114: 58-87
Issue date	1905-11-23
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/5908
Right	

を祈り奉る。

演說會記事

祝天長節

九月廿七日、本學期第二回の演說會を開く、

秋晏洪濶、灝氣清澄、朝暎八紘に輝く、微臣等
今茲に第五十四回天長の佳辰を迎ふ。げに何も
のゝ歡喜か之れに若かんや。

惟みるに、我帝國が玃貅百万、干才を滿韓の野
に動かしてより月を閏する十有八。而も連戰連
捷、克く露兵を吾競爭場裡より驅逐し、優に霸

を東海に稱するに至れる、是れ一に臣民が忠勇
義烈の精神に因る所なりと雖も。 叙聖文武な
る、 陛下の餘德たらすんばあらず。

今や陣雲永遠に飛散して、乾坤清淨、内には金
風白露穰々たる秋禾の豐饒なるあり。外には友
邦英と新たに握手、相提携して更に一大雄飛を
試みんとす。嗚呼また盛ならずとせんや。

茲に此の佳辰に際し微臣等一同。 聖壽の無窮

聞説く、出演希望者甚だ多く委員其の採擇に困
むとあゝ龍南の演壇こゝに生氣あらん、欣すべ
し。七時開會、瀧委員登壇して辨論の眞義につ
いてとき來る數百言、舌鋒秋霜の如し。すでに
して好個の題目を提起して、突如一人の演壇に
立てるを見る、

個人の勢力と信仰 石橋 勝君

前提として、所謂信仰によりて、偉大なるものとなりたる
人物、當年の熱血漢冠鑑日眞をあげぬ。あはれ安房の生れ
の海士の子が、渾身の血を漲らしめて一大獅子吼をなし、
莊嚴雄大なる大精神を傳へてより、春風秋雨に幾年、
人は濁惡の邪道に落ち、法華の行者の生命は何處ぞ。梵音
力空しく、法燈正に消えんとするとき彼日眞は立てり、念
佛無間、禪天覺、四條橋上萬丈の長虹は、赫々として正に火
をはかんとし熱血漲る大折伏は、つひに行路の衆愚の耳底

に響きぬ、之れ正に宛たる祖師の面影。つひに彼の大精神に感じて人多く之に歸せり。あゝ信仰の個人に及ばず勢力、かくのごとく大なり、吾人よろしく之によりて、大教訓をうべき也。

語々として數百言、流調の音よろこぶべきも、單調の弊にちいるなきか。オリヤナリテイーに乏しかりし事、引用の詞句に誤ありし事、そはとにかく、偉大なる熱は又偉大なる熱によりてつたへられざるべからず。一層の修練をへば君の前途や蓋し洋々たりと云ふべし。

時代思潮と伯夷教育

佐藤 作三君

縦横の才氣を眉宇の間にうごかし、片頬に微笑をたへつゝ語りけらく

「何となればそは常識以外の事なればなり」この言を以つて、幾多の事は暗裡に葬り去られたり、世は今や滔々として、常識主義となりぬ、コロンブスの米國發見、さてはアツトの研究は當時の常識者より見れば、之を狂人と嘲めしも宜なり、現世豈之と異なるあらむや、世は正に常識以上のハイセンスを没却しつつあり。横井小楠なりしと覺ゆ、曾

て曰ひける事あり、時代思潮に棹さして悠々吾生を終らむと、吾はこの説に賛成するものなり、まはれ刺身に生薑あるごとく、時代思潮の大勢に反抗するものも必要なりとすこの覺醒者と、滔々者流との戦争は、往々にして慘酷たる悲劇を講成す、伯夷教育のごとき豈其の甚しきものに非ずや、彼等の説は極端なりき彼等は時代思潮の反抗兒なりければなり。大勢に反抗して理想に生き、理想に死する人の生涯いかに尊き哉、基督然り、釋迦然り、豈只伯夷のみを舉げむや。吾人は偉大なる先覺者のまことに不世出にして、また見るをうべからざるを信すると共に、我も又再び世に出づる事なき也、諸君乞ふ吾等をして理想に死せしめよ途中にてノートの廣げ、引用の箇所を探するなど眞摯の態度に於て欠くるなきか、好個の才人乞ふ自重せよ、吾人は深く將來の君に囑望するものなり。下駄の音を天井にひゞせながら、悠然として登壇したるは

青年奮進

木下 三四彦君

なりとす、漆黒なる髪、蒼き顔、鬼氣人に迫る、沈痛なる語氣を以つて語らく。

我國が世界の活舞臺上に立ちたる第一着歩として、吾人は世界に超越すべき立脚を得たり、國家の進化は國民の自覺に隨伴して生ず、國民の自覺は自主獨立の精神の發達に外ならず、國民は必や自己の責任を主んじ、愛國の熱情中に溢る、吾人は今之を分ちて自覺的愛國心及び虚偽的愛國心の二つにせん、前者の理想は平和なり、後者は軍國主義を取る、之れ古來の歴史の普く証するところ、吾人今こゝに慨々するを用ゐず。思ふに我國は立憲制をたて、駁々たる文物、今や燦然として花を開けるに似たり、然りといへども、こゝに雄大なる國民的自覺あるか、吾人の所謂自覺的愛國に横溢せるや、虚偽的愛國にまちいれるもの正に一步なる事なき乎、眼を放つて政界の一角を望めば吾人轉た傷心に堪へざるものあり、然りといへども吾人は青年の大なる責任を思ふて、決して落膽するの愚を學ばざる也、今や興國の運正に青年の双肩にかゝる。十八世紀の英國は太に今日の我國に似たりき、かのピットが青年の重任を自覺し、有爲なる青年議員を糾合して立つや、マルボロは之に對して嘲弄の言を吐きぬ、されど見ずや、彼等青年は果して如何なる事業をなせる、更に當年のガンベッタを見よあゝ現代に於て最も要求せらるゝは眞摯熱血の青年にあらずや、吾人はこゝに青年の奮進を望むや切なりと

す、吾等幸にして其陳吳たるをみるか。
吐き來る風發の論議、よく聽者をして其旨を了せしめき、

一大偉人を追想して
新日本の前途に及ぶ 山内 巖君

一辨士はあらはれたり、其貌や大象の眠れるごとし、一度口をひらくや滔々幾千言、之れ正に龍南論壇の老將軍暫く其の言をきけ。

十九世紀の初期より、世界政治の大舞臺に幾多の巨人出でぬ、我國には西郷あり、支那には曾國藩あり、ドイツのビスマルク。フランスのガンベッタ、英のグラッドストーン、デズレリー、之等の大人物があらはれて、其の拉腕を振へるは實に千古の大偉觀なりき、吾人は此等の巨人の中より一人をわらびて、以つて現下の時務を論じ、新日本の前途に及ばむとす。吾人の一大偉人は果して誰ぞや、ビーコンスフィールド、デズレリーなりとす、何故に吾人はグラッドストーンを引き來らず、またビスマルクを引き來らざるか、刻下我國の時務に當りて、最も要求せらるゝは、後者の如きにあらずして、眞にデズレリーの如き人物なる事を信すればなり。抑もビーコンスフィールドとは如何な

る人ぞ、彼は英國にありて非常なる輕蔑をうけし猶太人の
中より生れぬ、人となり不憚不屈、其議員たらんとて選
舉場裡に立つや、只猶太人なりてふ簡單なる理由のために
、落選するもの六回、七回目に至りて辛うじて國會に入る
事をわたり、彼始めて下院の演壇にたてるとき、嘲笑漫罵
の聲、四方にわたり其の言を妨害して止まず、此に至つて
彼は大呼して曰く、汝等何時の日か必吾言を傾聽するに至
らむと、果して其言の如くなりき、其のゴブテン、プライ
トを敵とし、保守黨の領收として、サルスベリーを使役し
、縱横の手腕を奪ひ誇々の論議をなして、よく其目的を遂
行せるるとき、まことに當代政治家の大に鑑むべき点少な
しとせず。彼の手腕の最も顯れたるはヘルリン條約のとき
なりとす、彼が露のゴコチャコフに對して、露國若し平和
を愛せんか、英國安之に従はん、露國若し戰を欲せんか、
英國亦敢て之を辞せず、吾には和戰兩様の準備ありと叫び
しは、豈之れ大膽にもまた痛快の極致ならずや、あゝ今や
我國に於て這個の政治家を要するなき乎、列國の風雲未だ
測知しがたし、黑風至るか、白雨來るか、處視耽々の間に
ありて吾人そらるに微笑を禁する能はざるものは、日英同
盟に對する當年の三國の苦心焦慮也、あゝ東亞の風雲に乗
じて立たんとするものは誰ぞ、今や實に我國はザスレリー

を要する事大なるにあらずや。

音吐朗々、説き來り説き去り、急霰のごとき拍
手に送られて、慥々爾として降壇するや、一紳
士あり、細長の体を提げて、正に叫ばんとする
は何ぞ。

獅子の風格と政客の態度 新庄 祐二郎 君

冒頭より英語の連發、雜報子茫然としてをる間
に論議は三十ノット位の速力ですゝみゆけり、

greatness はいかに諸君に感ぜらるゝや、雄大美妙なる
快感の、湧然としてをこり來るにあらずや、greatness
は greatness of power なり、吾人は greatness を
思ふに、lion の風格を忍ばずんばあるべからず、あ
ゝ偉大なる獅子、月は大原をてらして漢千里につらなり、
肅然として、萬物の聲空しきとき、一聲の大獅子吼をきく
や、襟自ら正しく、覺醒の眼自ら明かなるをばゆ、され
ど吾人は曾てこの獅子が憐むべき迷つる黒奴を救へるを
きけり、疲れたる旅人の枕頭をまもりて、ふすがたにす
みし事をきけり、死肉を食はざるものよ、其意氣大に感ず
べきに非ずや、吾人は常にこの親友に對して、畏敬の念を
抱こさずんば非る也、

と、更にチエンバレーンを説き、現代不賑の政界を悲み、英語、獨逸語を語り、最後に吾人の責任を叫んで降壇。我之を好むと云はゞ足るべきを、セアリーベしますと云ひ、論半ばにして時間の延期を委員と相談するがごときは君のためにとらざるところ、さはれその元氣の横溢と、一湧千里の快辯とはひさしく吾人をして讚嘆の聲を出さしめしもの、

眞相を見よ

高田 保馬 君

史をひらいて最も快なるものは革命也、革新也、クリストを見よ、マホメットを見よ、人類の歴史は這個革命の兒によりて光輝あり、社會の進化は彼等の力に胚胎せり、佛國の革命に於けるロベスピエール、英國革命に於けるクロムエル、皆是れ革命の先覺者也、夫れゲーテが所謂公然の秘密は永劫の闇に葬り去らるべきや、蠢々たる凡俗は然らん、然れどもカーライルの所謂 *Unseen* は然らず、シヤンタークを見よ、彼が一度佛國の社職が、決して滅亡すべからざる事を深く自覺するや、昨は無名の一村姫忽ちにして國家の危難を双肩に支へ、つひに永劫の生命と自覺とを後昆につ

六十二

たへぬ、マルチヌルーテルを見よ、彼の進路は只眞理あるのみ、紫衣の法主、主冠の帝王彼の前に果して何の權威ぞ、笑ふべし濁惡邪穢の邪念を胸持して、徒らに外見を以つて愚民をまごはすものや彼の大自覺によりて、つひに宗教改革の大業は成就せられたるに非ずや。見よ偉大なる生靈は事の眞相を見る也、彼等この大眞相に接觸するや、確固たる自覺は、つひに万人の迷夢を醒ます革命の子よ何ぞそれ盛なる、然りといへども一度この眞相を見る、其の眞相を失ふや、其結果まことに悲むべきものあり、ナポレオンを見よ、エヂプト航海中無神論者を罵りて、若し汝等の言のごとくんば、星辰を作りむものは果して誰ぞぞ喝したるは實に彼の大確信なり、この信念あり、彼の手によりてなされたる革命は、如何に生命と熱ありしや、この信念あり、彼はアウステリツに勝ちマレンゴーに勝ちぬ、彼の名譽は佛國の名譽なり、あくこのタイタンの姿如何に尊かりしか。然れども彼が一度皇帝となりて、その確信をすて、アウストリアと同盟せんとするや、忽ちにして九天の高きより奈落の底に沈みぬ。それ糞中の虫其の臭を知らざるは現時の狀態ならずや、笑ふべきかな現代の文明。偽善と虚偽とを除いて残るは何ぞ、人道と平和を讃するの聲は流血と積屍とをよるこぶ聲なり、宗教と道德と、笑ふべきかな何

等の權威、吾人は永劫に眞相を看、假想を脱してすゝまざるべからざるなり

と、何ぞ其の言ふところ。豫言者的なる、吾は君を見るごとにカーライルの風格を思はずんばあらず。蓋し其の熱と、精進の意氣に於て兩者互に相似たるところあらんなり、結論に至りて吾鋒火のごとく、最も力ありき。

右終りて遠山部長の注意あり

石橋君、其の流暢なるは長所なれども平板なるを惜む、音聲の修養と嚴正たる態度を必要とす、四肢若し演説に活氣を添ふるにたらざれば、之をして邪魔せしめぬ事が必要なり。

佐藤君、其登壇するや、さも渴に堪へざりしものと如く、水をのむはよろしからず、大に飢ゑて周粟を食はざりし、伯夷叔齊に似ず、其の長所は思想の轉化の意想外なるにあり、されどあまり奇を衒ふはよろしからず。

木下君、態度端正、あまり活動なかりしをを

しむ、音聲は透明を欠き、明晰ならず、一層正をひらいて語るを要す、

山内君、最も立派なる演説なりき、たゞあまり扣上手すぎる点あり、態度に批難なきにあらねど内容音聲皆よろしかりき、

新庄君、演説の態度は餘ほごよろしかりき、ライオンの風格を論するまでは勢よく甚だふさはしかりしが、龍頭蛇尾の嫌なかりしか、疑問的に調多かりしもよろしからず、

高田君、質朴にして虚飾なき所が君の價值なり、口調すこしく早きにすぐれど、條理井然、思想に活動あり絢爛あり、結尾もよく、演説として成功に近し、たゞ音聲のわれるは君の欠点なれば、修養をつんで之を排除せられたし。

◎弓術部記事

一聲の杜鵑萬点の水螢、夏を故關に留め來つて、旅衣漸く秋の仙女に親む頃となれば、弓手の

しむらむ自ら風に戦くも嬉しからずや。吾部茲に交弭の友を集ふること百有七、然して朝に夕に寥々調々の矢風を斷たざるもの、皆桑孤の穹然として崇ぶべく、雪翁の喁然として樂むべきを知る有れば也、楚樹の秋、彼等が七幹活けるの態を囁かんか、努鏃天に鳴て、又何物の憚々響く無からん者ぞ。

○綠沈稜々

▲新たに加入者を募りて七十餘名を得たり、九月十八日小松原の射場を清めて、稽古初を行ふ。
▲射初式——「あの射初式と申しますとどういふ儀式をなさるのですか」私は未だ不案内ですから」など、初めは随分眞面目腐つて見せた新部員も、十月一日愈々其日と定まれば、早くも四五十人集つて、喧々互に惡口叩き合ふ程の不遠慮さ、扱例の如く順番を規め先づ金的を始め、初見參の某を一番に、古珠の某を次に以下三名、各大事に構へて射たれども當らず、六番目

に立ちしは進藤……素早き哉此男臆面も無く金的の眞唯中を射貫きたり、後に續きし四十有人の吾こそ連、掌中の殊を奪はれし体にて眼バヤ／＼、暫くして吾に歸り一同雷の如く拍手したれど間にあわず、命てた當人は頸を差出してフン、御褒美を頂戴して既に幕の内に引込み居たりき、残りの者一順射て廻りたるも耻のかき損にて終り、直に尺二的十射に移る、眼を閉ぢて聞かば、素人樂隊の太鼓打と思はむ、蒸暑き殘夏の大氣は、力一ぱいに膨脹して、大的に矢の立つ音を不調子に横着に響かせてドタリ／＼、失取小僧の聲迄牛の如く然り、十射の後の結果は、

▲一等七中(進藤)、二等全(小野)、三等(生駒師範)、四等(大日方)、五等(川浪)、六等(佐藤)、七等(中島)、八等(東師範)、九等(辻)、十等(木通)、十一等(波江)、十二等(久米教授)、十三等(大内)、十四等(堅田)、十五等(勝田)

▲師範の免許を経て此日昇級及編入せられし者左の如し、

堅田務(三級へ)。大日方俊、川浪澤人(四級へ)。

。吉川宏、江越信胤、武田留五郎、色川三男、

松島義三郎、辻敬正、佐藤忠士、岡村三四(五級へ)。

勝田孝興、八束清貫、安藤椿介、木通芳彦、

石橋勝、小川道之助、吾妻耕一、橘榮、石原

重成、興元達禪(六級へ)。

▲遠矢練習——十月初、十數名の物好連松影に

陣取つて武夫原頭の大切な草も何も滅茶久茶に

して、懸命に三十間六十間の遠矢練習を試み、ヤ

ンヤ自分達計り笑壺に入りて騒ぎ立つる最中、

時節柄舉動不穩也と有て、警視廳より解散を命

せられしんぬ、焼打ありしや否やは不知。

▲例会——毎週例会を木曜と定めぬ、第一回は

出席三十一名、第二回は廿八名、外來の弓客、

先生方の來場も其都度ありし。

○羽咋歌々

▲秋季大會此度八幡大明神吾殿原の弓勢、御覽思召出でさせられ候趣聞候條、腕に覺るの面々はいも早く御出馬有之可然云々と云ふ滅法界な奉行の立札に、十月廿八日の午の時過ぐる程より、例の小松原射場の大路にヒシ／＼と驅け参じたる者六十餘騎、拙者「オオ禪」も既に雲の神扉の小陰に佇んで、今日の晴れの場見逃すまじ聞逃すまじと片唾を呑んだり、

弓弦の瀧、白絲の緊れ掛りたるが如き下、今日を命と覺悟の若武者、中には老後の一花咲かせんと健氣なる古猛者も交りて、見るからに勇ましき光景なるを、兎見れば紅の雲の彼方、八幡大明神を始め奉り、古今に名高き射手の魂靈、星の如くに揃み居たる難有き、時至り順序定まるや三寸の五色的梁の中段に輝き懸れり。與一室、晴れの場にかう五色的の懸つた所は何とも云へないね、拙者も扇の的を思ひ出すが、然し今日はあんな幸運が誰の手に落ちるのやら、

ト心細い次第だナ」八郎爲朝「さあ誰ですかナ、皆邪氣の多い當世の人間の事ですから」下界の面々は腹の内でも吾こそ。一順は無事に済み二順目となれば、場内水を打つたる如く静かなり、十四番の老先生宮原氏（來賓）先づ黒的的に命て、十七番の平岡（中學）次で赤的を射る、満場手を拍つて稱讃、八幡大神「オイ與一御前の仲間だ」。

▲砂の上には猶三個の的あり、射良げに見ゆれど中々に、頭熱し肉震ふ人々には至大の難物、せき上ぐる心中の猛火を押し下げく、交る換る出でくは射れども其後は少しも當らず、三四五順其儘に過ぎて稍息み來つて場内色めき立てば、藤崎の使鳩「早くも兵糧を出せば誰か中てるのさ、娛樂室へ御使は眞平々々、一体今日の奉行が氣が利か無いのよ」委員「誰だ？氣の利か無いなんて後の方で云ふ奴は、喰意地が張つてるから中らないんだ」諸靈クス／＼たる、折柄ハユ

矢、金色の的を大目方、銀色の的を中島、少しく遅れて青的を値賀（中學）引續いて見事に射落せば、雲上の靈氣、下界の面々、吾を忘れてやんややんや!!!

▲兵糧の分配あつて一同犬に落ち付く時、砂の上には五寸の的新たに掛けられたり、此度こそはと云ひ合はさねど、誰でも彼でも野心は勃勃、取はけて色に出でける色川浦川、秋と云へば水枯れて瀬の石あらはに、岸の藻草も色褪せつと石川、川浪、冷しき瀟に小矢魚の一群を見れば、北川土砂を飛ばして三本堤に當り近村は大洪水、勝田高田を顧みて武田も當たつ田かと向へば、ま田立田三本引い田ばかり田と答ふ、堅田ひそかに二中して喜べるを、富田吾も裏切せんとて二本中てたれば、悉無を盟ひし田の字仲間物議起らんとす、今は之迄也吾は所要あつて歸る者也と一寸身振して退場せしは富田惡洒落をなす人かなと評判せらる。

▲龍南山自炊院の大徳進藤燈雲師、心を燈し口に加羅華尼經を誦して射つれど一本も中らず、齒を食ひ縛つてくやしければ、來賓の市原氏、同敗相憐んで尤だ／＼と地團駄を踏みめさると、進藤に味方せしは猶安藤ありと雖佐藤は知らぬ顔して二本失敗し、久米教授は差支の爲半ばより中止、生駒師範の無中と東師範の一中には何人も仰天し、西村の後姿には頼光「そこだ夫が鶴の射形だ」と援兵し、宇野、平岡、值賀、大河内、の中學連には義家公御意斜めならず。

▲茲に一本組の一群辻、波江、中島、小野、大目方あり、其内の一人鳴金入の弦にあたり騷々敷を破つて得意がるを、誰やら喧敷と云ふに聞き咎め、之はしたり貴公ヘトオフエシのソナタを聞がは何とかいふ、そなたはワグネルの足拍子だに知らざるもの、何ぞチャイコヴイスキ畢生の樂スケルツォの四弦。四部音の妙と雖吾五分弓の一弦音及ばざるの真味を解せんやだ

、と氣焰の矢當るべからずとは御存じ召さずや、昔は山坊師今は還俗しての大目方、日頃の手並無かりしは何故ぞと問はれ、「た弓かわい矢一聲かけてちよつとまご迄つる氣とは」なんて鼻先の小謳、此奴面に似ぬ粹者と見へたり。

▲此日は中納言も新寮の舍人も來らず、其代り高取、松島、徳富、など數名の新顔見ねたるは何寄岡村三四郎義晴未だ若冠の身に候へ共、名たたる弓取の家に生れ候へば、自づと備はる天稟の弓勢、かゝる折にぞ御覽じ置かれやと名乗つて中つるは中つるは、花の若武者紅葉せる一枝を簾に差添、夕日まばゆき秋の冷風に鬢の毛をなぶらせたる風情、いさぎなんど云ふ許も無し。小的十射の定めなりしが、時移りて早松原の下陰はの闇くなれば、六射に留めて同点は競射を行ひ、左の如く等を定む。

▲一等二中(岡村)、二等全(堅田)、三等全(佐藤)、四等全(北川)、五等全(宮原氏)、六等全(富

田、七等(川浪)、八等(中島)、九等(值賀)、十等(大河内)、十一等(東師範)、十二等(小野)、十三等(辻)、十四等(石川)、十五等(大日方)。

○燕角弭々

▲大會後の例會——今日迄三回あり、出席者毎回廿名未滿、剛の者少しく霜にちけたりと見ゆ。

▲三部對三部競射——十一月一日相方五名宛の撰手を出して勝負す、見物人、彌次、黒山の如く集りて騒げば、皆幾分かのぼせ氣味にて目頃程の功績なし、二部の大將大日方獨り勇奮し味方を勵まし、遂に大目的には十九点に十七点、小目的には同点に乙二部方の勝利となれり。

▲一部對二部競射——竹子城主脆くも打破られて東の方には敵無なければ、未だ彼方の南には法螺太鼓打叩きて勢高き三百の強敵あり、此時俊謙入道士卒を初め土方人足に至る迄呼び集めて申す様、三部の軍勢を打取つて其儘に、覇を

中原に嘯へんと思ひしがど、彼村上が餘義なき願、武士の面目として黙む難ければ、一氣に雌雄を決せん覺悟と、十一月八日入道を最先に六騎の猛者敵の旗元に切り込んだり、池の眞菰や菖蒲草、何れを分かぬ武者八騎、此方も同じ姿にて眞黒々の車返の軍法、來れや應と戦へども、實は内心ビク／＼したる越後勢なれば、小酌十五に對する八点の見惡き敗北、されば此方は劍光裡安泰身とも何とも云はず、舌を卷いて退却し了んぬ、まるで琵琶の文句だ。

▲東西向ふ所敵なきに二部軍は中國平定の大志起し、教授諸先生の殿上人と何かの節會に、御前仕合を行ふ由、實行せば見ものなるべし

▲寢覺勝の枕に通ふ虫の聲々、有明の月ぞ寒たき棹雁の影、秋風一滴の露。愁情一弦の恨、秋は流石に斷腸の想深けれども、丈夫弓杖に倚つて蕭條の氣を呼ぶ何ぞ滿天の秋悲を泣かんや、冬來れば萬物蹉跎たり、高寮の琴已に絶へて城

邊の柳搖落す、此時此時、霜に白氣を吹いて星
昂誰か弦の音を樂まん者ぞ、其夕我に面なきも
、肉動き骨鳴つて又醉感頻なるを覺らざらんや。

(オオ禪)

小詩會例會

十一月十日、例會をひらく、定刻前にやつて來たのは芒村子、
「オヤ／＼まだ誰も來ないのか」などと火鉢の火を無性に堀り
わくす、いくら堀つたて半分灰になりかかつた炭團が一つの火
鉢について三つ／＼しが入つて居ない、其中火箸代用の鉛筆に火
がつく騒ぎ、やがてやつて來たのは夕闇子だ、「ヤア早かつた
ですね」早速火鉢を抱へこむ、「まだ寄宿は火が出ませんか」、
「いや／＼してまだ／＼前途頗遠遠たそうです」、二人の笑聲
のきぬない中に來られたのは、鬚の生ぬかかつた鳳章子、例の
丁寧な辞儀、芒村、夕闇の兩君は丁度二つ合せて一人前位の
お辞儀をした。さうへ來られたのが新來の錦浦子、始まして
の「挨拶よろしく、談話がひとしは花が咲いてるさうさへ白月君
が來た、さて題をさめる、考へる、

どうも菓子がなくつてはさ云ふ」誰やらの發議に滿場一致、手を
たたき、菓子が來る茶がくる中中歌さうの騒ぎぢやない、話で

無中になつて、菓子も大半片附けたさうさへ、ヌ、ラ、リ、こやつ
て來たのは名高い杭子也、蓋しヌラリと云ふ副詞には御恩
論もあるか知れないが、漂然としてさやつて來て、障子段から
ヌツと顔を出したのだからヌ、ラ、リと云ふのだ、閑話休題杭子
先生御託宜に曰く「一番上手な人は一番あさ／＼來る、んだ」と、
(賛成者なし)、いきなりカズテラを口の中に抛りこむムグ

／＼、パチ／＼、但しムグ／＼は口の動作、ヌチ／＼は目の動
作だ。いよ／＼歌を考へ出した、便所へ行つた夕闇君は「出來
たぞ／＼三つ」さ云ひながら歸つて來る、時間もこの位利用がで
きると結構だ白月君は超然として、向ふをむいて考へてる、鳳
章君に至つては實に苦吟慘澹たる光景を呈し、よその見る目も
氣の毒な様、錦浦君は「僕アもう二十出來ました、然し、多作必
しも佳作にあらずで、へ」などと頭をなでてゐる、これには一
同あつち度肝を抜かれけり。芒村君は終始菓子皿と運命を共に
すると云ふ風で食ひに來たのか、歌作りに來たのかわけがわ
からない、然し作るのは中々早い、もう七ツ出來たさう云々で
ゐる、杭子に至つてや、惡口をいつていで、つひに夕闇子に叱ら
れてもれめず、何かしやべつてゐる。もうそろ／＼五時だ、一
番先きに出來たのは夕闇君、ついで芒村君、歌の数は各人十首
なのだ、それから互選し採点して六時頃閉會した、あたりはも
ううす／＼くらい、さても今日の愉快なる會合に、天山・聖花、蓮

北の諸君が來られなかつたのは何よりの遺憾であつた、また近日ひらく事とする。次に批評といふのもたゞしいが一寸今日の歌について一言し様と思ふ、妄評多罪は始めから斷つて置く。

錦浦君のは優婉と云ふ一言で蔽ふ事が出来る、然しあまり朦朧となる弊がある、「蓉美の雨」のごとき其一例ではあるまいか、霞をへだてて物象を見るのは美だ、詩の朦朧も其位の程度でやめればよいけれど、晦滋となつては手がつけられない。明星一派のわかしな歌風は斷じてよくないと思ふ「君病むと」一種美しい歌だ、之や錦浦調、

白月君、君の仰詩に熱心なのは同人のひとしくみとむるところ然しわり合に振はず、また單調な様に見ゆるのは、あまり範圍の狭い叙景と、またきほめて客觀的な、單純な想を歌はれるからと想はれる、名詞修辭の洗練はありながら、何となく力がたらく様に思はれるのはたしかに此の故だと思ふ、君の前號の新牀詩「春園」のごときたしかに其一例である、僕が君に願ふのは更に其取材の範圍を廣うし、主觀的熱情をうたはん事である、然し君の春風嫋々的の優美なる思想と詩形とは大によるこばしい事と思ふ。

「月の機」誰か曰く、涙と云ふ、

鳳章君、君や多技多能、然も皆堂に入つてゐるにはたゞごとく、

「野に立ちて」一種雄渾な調、たしかに君の獨特の調だ、

「落日や」之れ鳳章調の弊にちかひる正に一步なるものか、
「亡骸を」哀韻呶々、君また此の心事あり、戰の予は涙子也。

「さすらひや」之を稱してリンデン調と云ふ、

天戟君、君が詩は憧憬の韻なり、敬度の聲なり、梁川の文に青春の熱血を加へて、之れを詩化したのだと云へば、少し仰山のやうだが當らずと雖も、蓋し近いのだ、豪放瀟灑の趣には缺けて居るとしても、高潔俗を抜く事幾千丈、斷乎乎として天使の調に似て居るのは、確に君の長所として敬服に値ひするのである。

「大海は」の一首、友を悼むは吾れを悼むなり、然かも區々たる凡夫の情に非ず、秋莊嚴の自然と人生とに對して、大人の哀情を述ぶ。

「芭蕉葉の」、哀情美、よく人を動かすは眞摯。「蘆の花」なつかしきに涙し流る。

星陵君、當年の雄將いまはた如何、「霧に更けし」たしかに君の面影があらはれてゐる、健在なれ、

夕闇君、

「人死ぬの」第一に感心してしまつたのが鳳章君だ、自分ば是よりむしろ

「空高く」をさる、

「黄金なす」詩的空想も此に至つて實に莊嚴である、君の詩に對

するさ一種美しい調和した流麗な調子、おぼろげながら思索の繩を手操つて、詩の要諦に達することか出来るこの二点が何より嬉しいのだ、

次回には一同で合評會でもやつたらうかと思ふ。

(夢人記)

秋季聯合庭球大會記事

本部は十一月三日佳辰の日をトし五日迄三日にわたる庭球大會を催し左の拾五校の撰手來り會し絶無と云はすも空前の大會なりき

長崎縣立中學

長崎鎮西學館

長崎市立商業學校

宮崎縣立宮崎中學校

豐津中學校

小城中學校

鹿本中學校

八代中學校

熊本商業學校

熊本中學

濟々巒

熊本縣立師範校

熊本醫學專門學校

佐賀中學校

久留米明善校

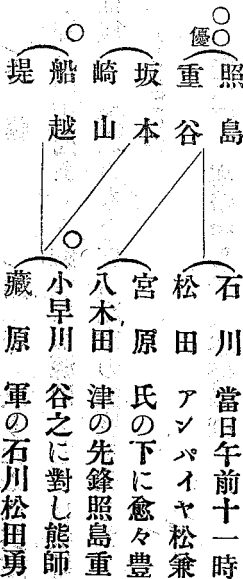
大會概況並に簡單なる批評を加ふ

三日組合

第一回 豐津對師範

(豐津)

(師範)



士武者振勇ましく拍手の中に悠々登場しアンバ

イヤがアレーの一令下るや否や茲に戰鬪は開始せられたり照嶋の打込み能く功を奏して熊師軍もろくも破れてさつと引く是に於て熊師軍の中堅宮原八木田大に怒りゼロゲームにして呉れんと秘術をつくして戦へども技量の程や劣りけん亦もや豊軍に致されぬ照島重谷の二氏敵の壹陣貳陣を打破り意氣揚々として優待すされば熊師の大將小早川藏原は味方のまけに氣をのりけ少猛にせめ立てゝ敵の中堅坂本崎山を打倒し敵の大將船越、堤、をも切りしたがへ頼勢もありかへさせんと勉しが大勢の決する所又如何ともする能はず遂に豊軍をして名をなさしめぬ

第二回 熊本商業對長崎商業

(熊商)

(長商)

新開 田口 右之結果にて長
一番ヶ瀬 犬塚 商一組を残して
米井 馬渡 容易に熊商を撃
河野 木谷 退せり斯く熊商

堀 永 の見苦しき敗を
齊 藤 熊 野 取りたるは其處
に種々の原因ありと雖主なる原因としては彼等は徒らに熱球のみを打ち沈重の態度を失したるにあらざるか

第三回 宮崎中學對熊本醫學校

(宮中)

(熊醫)

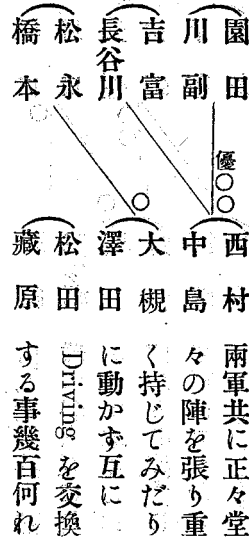
佐竹 中村 醫學校の庭球界
日高 緒方 の重鎮渡邊氏は
森 好 入江 打方正確、フチ
三好 眞砂 アハンド、バッ
松山 山本 クハンド、スマ
野元 渡邊 ツシングに於て

技量、卓越し極力奮闘したれども流石敵軍の重鎮松山、野元庭球マツチの法則利用し球を渡邊氏に送らずして能く其弱所に肉迫せしを如何せん

第四回 佐賀中學對八代中學

(佐中)

(八中)

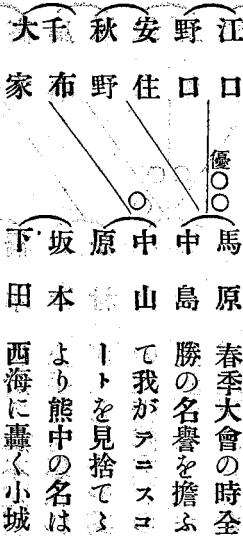


もミステーク少く勝敗の色見わざりしが園田、川副、敗れてより佐賀軍又振はず遂に八代軍に名をなさしめたり

第五回 小城中學對熊本中學

(小中)

(熊中)



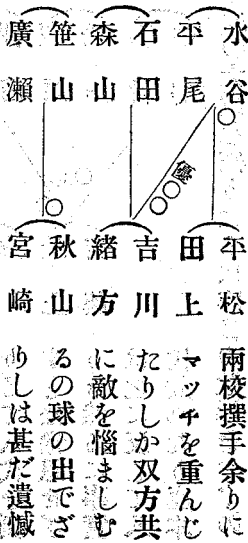
中學此の度の戦に此の強敵を倒して功名して吳

れんと鋭氣満々たり然れども熊中勝て誇らず益々慎重の態度をとりて敵を輕んぜず大將の手刀を用ゐるに至らずして難なく小城の計画を水泡に歸せしめたるは感服の外なし

第六回 長崎中學對濟々

(長中)

(濟々)



とする所なり

以上三日

四日組合

第七回 鹿本中學對鎮西學館

(鹿中)

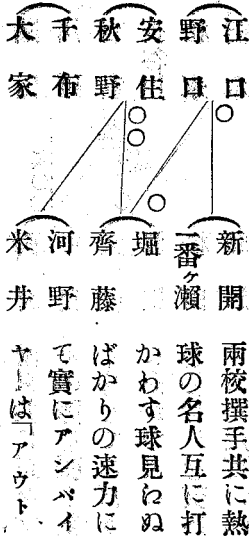
(鎮西)

小島鳥山の動作當を得て遂に此の徑敵を降服せしめたるこそ長崎庭球界の名譽なれ

第八回 小城中學對熊本商業

(小中)

(熊商)

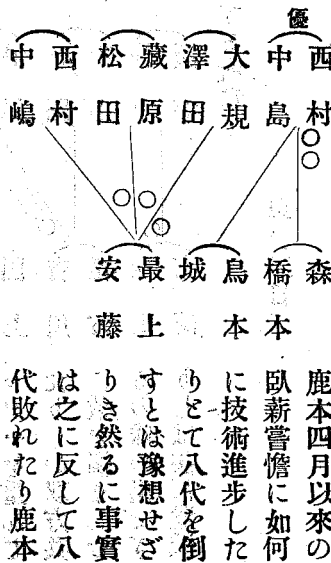


「イン」の識別に苦めり只だ兩撰手の爲めに惜

む其の打方の正確ならざりしを」
第九回 八代對鹿本

(八中)

(鹿中)



能く此の大敵を破りたるは昨日の敗辱をつぐの
てあまりあり想ふに八代は専ら防禦に務め鹿
本は攻撃に力を盡し爲本氏の機を見て「ネット」
近くに突進して打込みたるは大に勝敗に與りて
力ありしならん

第十回 豊津中學對宮崎中學

(豐中)

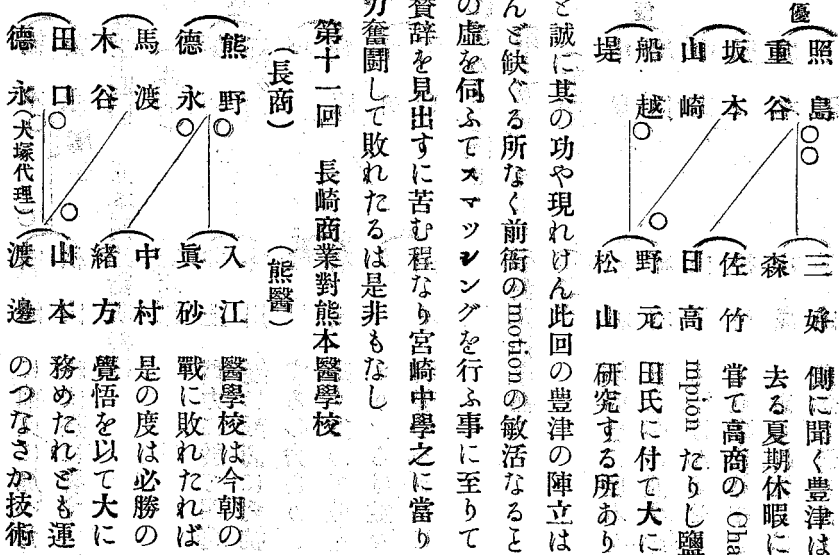
(宮中)

しと誠に其の功や現れけん此回の豊津の陣立は殆んど缺ぐる所なく前衛のHononの敏活なると敵の虚を伺ふてスマツンングを行ふ事に至りては賛辞を見出すに苦む程なり宮崎中學之に當り極力奮闘して敗れたるは是非もなし

第十一回 長崎商業對熊本醫學校

(長商)

(熊醫)

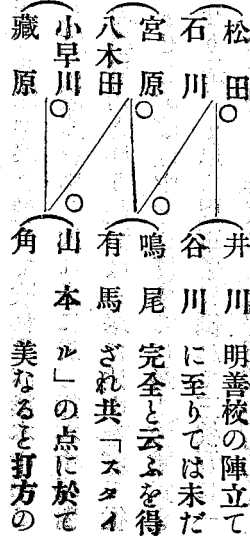


の劣れるか復も敗れたるは氣の毒の至りなり

第十二回 熊本師範校對明善校

(熊師)

(明善)

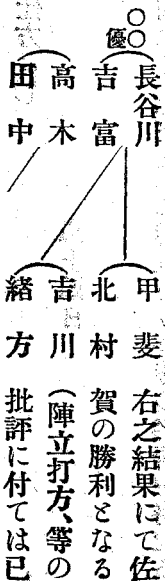


正確なると殆んど完全無缺なり然るに熊師軍をして勝を得せしめたるは未だ「マツチ」に慣れざるの致す所か

第十三回 佐賀中學對濟々

(佐中)

(濟々)



橋本 ○ 宮崎 に前頁に加へた
松永 ○ 秋山 れば是に畧す

第十四回 熊本商業對明善校

(熊商)

(明善)

新開 ○ 井上 實力に於て明善
番ヶ瀬 ○ 谷川 優に熊商に對抗
堀藤 ○ 鳴尾 するの力あり
齊藤 ○ 有馬 斯く重ねて敗を
米井 角 とりたるは益々
河野 山本 明善のマツヤに

慣れざることを証せり

第十五回 熊本中學對鎮西學館

(熊中)

(鎮西)

中島 ○ 今村 鎮西已に鹿本を
馬原 ○ 橋本 服し序に熊中を
中山 ○ 山下 も平げんとせし
原山 ○ 松村 も見事に熊中よ
坂本 小島 り破られたるは
下田 鳥山 残念と云はんも

仕方なし

七十六

以上四日

前二日に於て互に勝敗あり全勝の名譽を得たる
は左の三校なり

熊本 中學校

・ 豊津 中學校

長崎 商業

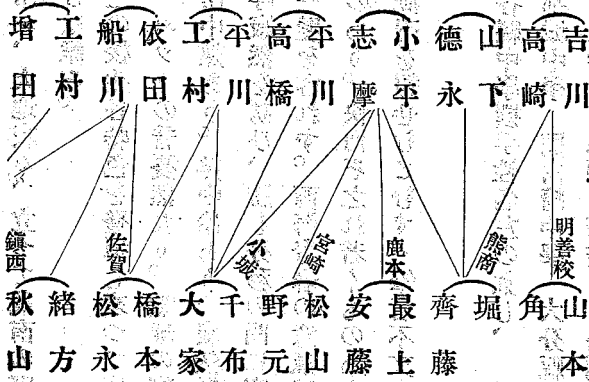
されば愈々今朝は全勝校互に決戦せんと先づ長
崎商業、豊津中學と戦ひて敗れ再び熊本中學と
對陣し遂に敵陣を落し入れ是に於て熊本中學對
豊津の戦争始まれり豊津は一舉に熊中を打て従
へんとせしかば熊中之に應ずるに最も慎重策を
以てせり是を以て豊軍遂に倒れて三校互に一
回の勝利を得て全勝校なし之等三校の「マツチ」
は實に今回大會中の花にて幾度か群衆の手に汗
を握らしめたるか幾度か觀者の心臓の鼓動を高
めたるか斯の如き「マツチ」こそ望まじけれ斯の

如くにして優勝の定まらざりしは甚だ遺憾とする所なれば三校翌六日を期して再び決戦せんとを約して退陣す

五高軍對聯合軍

(五高)

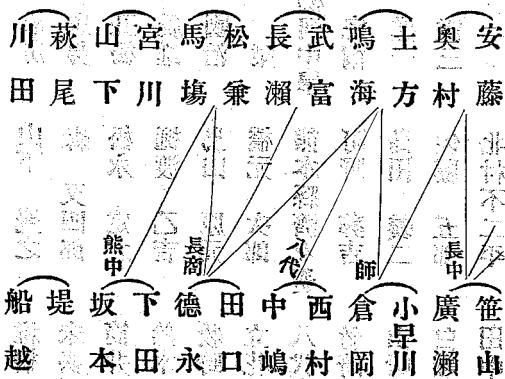
(聯合)



(三校優勝決戦五高對聯合軍記次回に載す)

運動部秋季野球大會

風聲天外の静寂を落し來つて、武夫原頭の秋はさねにさねたり。金峯の茜、阿蘇の紫、そゝろに健兒が胸にかよひて、腕の鳴りはやまず。戦ひの聲すでにれさまつて剣をとるの時は去れり



。大氣冷々、大地寂々、立つて龍南の野に觀聲をあげむは誰ぞ。

西海十三の校生各特色を發揮し來つて鹿を中原に爭ふ。バットの音憂然たり。熱球の響秋風に競ふ。冷中熱あり。熱中冷あり。寂然歡呼を呼び、觀呼寂然を誘ひ、勝を分秒の間に窺ふところ、間一髪を容れず。西海青春の意氣誠に躍如たるものあり。快何ぞ之れ若くものあらむ。左に其の概況を報せむとむす。筆者不文幸に諒せよ。

各縣中學撰手性名左の如し、

宮崎縣都城中學 同宮崎中學 大分縣大分中學
P 井上 知治 原田 清吉 松岡 武夫
C 安樂 謙信 中天寺 犢 三ヶ尻
S.S 坂元 勇 小田 耕夫 岩下保太郎
I 柳橋 杜巳 黒木 眞善 尾渡 利雄
II 二宮 善成 河野 辰次 紀古 丁
III 佐藤 弘 甲佐 知定 奥川 元

長崎縣長崎中學 同鎮西學館 福岡縣豐津中學
L.F.C.F.R.F 池田 正榮 前田 勉 淺川 一夫
L.F.C.F.R.F 大峰 滿彌 有川 定賦 山之内 毅
P 園田 嚴喜 小嶋時太郎 川上 乙彦
C 廣瀬 昇 多賀谷武夫 安永 要藏
S.S 森山 隆次 今村久米次 井神 福松
I 久保 成房 山下 覺之 椎橋 榮
II 松山 忠男 森 又四郎 未松菊之助
III 平尾 丑松 松永 定之 筒井 玄
F.R.F 留月 辰雄 樋渡 乙吉 鈴木 昇
C.F.R.F 松尾 國治 鳥山 原元 牧野 轉
L.F 石田 榮 橋元 次郎 立花 了觀
福岡縣柳河中學 熊本縣濟々養 八代中學
P 永野 完爾 町野 彝吉 竹崎
C 嶋添 進一 島田 義二 山崎 忠康
S.S 石橋 謙三 佐藤 五郎 白瀬 等榮
I 永吉 北村不二平 田中 豐喜

C	P	L	F	C	F	R	F	III	II	I	S	S	C	P	L	F	C	F	R	F	III	II
木	森	河	山	中	山	中	山	多	山	分	皿	今	寶	熊	森	中	淺	竹	吉			
下	本	本	傳	修	修	修	修	田	富	銅	井	村	來	本	純	山	井	迫	田			
平	通	信	二	郎	郎	郎	郎			榮	實	滿	清	商	三	良	枝	太				
作		江	松	有	有	有	有	佐	西	高	井	村	神	熊	林	德	尖	本				
		島	尾	富	謙	謙	謙	信	村	橋	上	上	山	本	田	富	元	田				
		廣	熊	五	五	五	五	一	定	茂	權	德	正	中	幸	忍	一	蘇				
		雄	雄	吉	吉	吉	吉	岡	正	成	三	政	敬	學	雄	躬	熊	熊				
		中	花	川	川	川	川	崎	橋	安	竹	城	右	師	元	川	中	原				
		村	田	川	川	川	川	崎	本	田	內	城	田	範	山	上	村	原				
																	鐵	文				
																	雄	敬				
																	七					

L	F	C	E	R	F	H	I	II	I	S	S
前	受	隈	福	東	卯	野	一	守	憲	衆	
田	樂	部	田	東	野	野	之	門	衆		
義	院	達	良	守	一	一	之	門	衆		
基	充	夫	三	門	之	之	之	門	衆		

九州日々新聞社寄贈優勝旗

九州日々新聞社には本會の催しあるを聞て優勝旗一疏を本部に寄贈せられたり、優勝旗の本旨素より最優勝者に與ふるにあり然れども本會の如く十有余の各校撰手會合し然も時日に限りある會に於て最優勝者を發見せんとする事は到底不可能の事なり、故に本部は九州日々新聞社と相談の上全勝旗として左の條件を發表せり

今般九州日々新聞社ヨリ優勝旗寄贈相成り

タルニ付キ左ノ組ニ合セテ以テ全勝者ニ一

々年間ノ所有權ヲ與フ

但シ次期ノ大會ニハ優勝旗ヲ得タル學校ハ
必ズ參加スベキ者トス、若シ止ムヲ得ザル
事情ノ爲メ參加シ得ザル場合ニハ優勝旗ハ
必ズ大會前日迄ニ本會野球部ニ返還スベキ
事

尙ホ全勝學校二ツ以上若シクハ全勝學校全
無ナル場合ニハ優勝旗ハ次期大會迄本部ニ
於テ保管シ置クモノトス

各學校組ミ合セ左ノ如シ

柳川			都城			濟々		
大	八	濟	都	大	八	都	大	八
分	代	々	城	分	代	城	分	代
師範			八代			八代		
鎮	柳	鎮	都	大	濟	都	大	濟
西	川	西	城	分	々	城	分	々
柳川			大分			大分		
商	商	鎮	都	八	濟	都	八	濟
業	業	西	城	代	々	城	代	々
師範			八代			八代		

八十一

鎮西師範商業柳川豐津長崎
商業豐津長崎熊中

宮崎熊中宮崎長崎
分校熊中熊中長崎

宮崎宮崎

但し此回に限り分校は優勝旗の條件に加はらず

優勝旗に各校撰手の頭上に掲げられたり各撰手の意氣頗る昇る、各撰手優勝旗の爲めに戦ふにあらざるや勿論なり然し之が爲めに仕合に一段の活氣を加ふる事云ふを待たざるなり、吾人は九州日々新聞社が本會の爲めにせられたる厚意に向て深く感謝する者なり、

第一日（十二月三日）

夜來の雨は漸く晴れたり空はごんごんのり野球に取
つては好天氣なり午前十時半より開始さる

勝

負

商業(9+7)

鎮西(6)

豐津(24+7)

長崎(4)

濟々(16)

都城(7)

八代(12+2)

大分(8)

師範(19)

柳川(14)

宮崎(18)

熊中(9)

鎮西對商業

審判者 大村 一藏

一戰鎮西軍先づ攻む小島松永四球に出で^{2.B.}^{3.B.}に

突撃せしも多賀谷以下引き續き三振に倒れしか

ば皆立往生、商軍皆小打撃にB.の露と果つ、

二戰兩軍ゼロ

三戰森四球に出で敵のミスに乗じ今日の先登を

なす、商軍の皿井^{R.F.}寶來^{S.S.}を破て生還す

四戰西軍不振商軍敵の混乱に乗じて三を加ふ

五戰兩軍少しも振はず○攻守地を代ふ頗る速

六戰鳥山今村ツニアウトに出で生還は敏、商軍

も亦四点を入れる。

七戰西軍敵の投球の乱れしに乗じて三点を得商軍○

八九戰西軍勢を得て奮戦大に力む寶來もさる者慎重に出づれば打撃の乏しき西軍如何ともする能はず長き恨を残して退く。

商業のP寶來進境驚く可きものあり好漢自重せよ

三振商業六、鎮西十四、四球商業十一、

鎮西三、

長崎對豐津、

審判者 山本 清

一戰長崎先づ攻む、双方得る所なし、

二戰久保^{2.B.S.}を破て生還豐軍鈴木^{2.B.S.}ダイ

レクトは美事

三戰双方○

四戰石田^{S.G.}に危く助る久保又もや^{C.F.}^{R.F.}の安全球

を飛ばして石田を無事ホームに送りしは快心、

豐軍鈴木も亦々^{C.F.}ゴロにて川上ホーミインせしめしは感心

五戦長軍不振然も守勢に立つに及でP園田手許狂ひ初め四球連發或はワイルドピッチとなりて敵をして十一點を得せしむ

六戦長軍更に振はず豐軍反二點を加ふ

七戦園田^{2.B.}フライに石田^{C.F.}に出でしむ空しく立往生豐軍打撃可成に振ふ牧野鈴木のオバ

3.B.等見る可き者多し

八戦長軍依然たり豐軍又二點を加ふ

九戦軍^{フルベース}を以て迫る然し留月の三振

し松尾^{フライ}を^{C.F.}に得らるゝに及で万事休す

三振豐津四、長崎六、四球豐津五、長崎九

長崎中學の撰手は諸種の事情の爲め半ばは來り戰ふ能はざるに至れりと然も約束は反むく可からざるとして未だ一回も練習せずして來れりと聞けり吾人は敢て其の不要意を責めず只來る年捲土重來能く今日の耻を雪ぐあらん事を希望して

止ます、

濟々對都城

審判者 加藤 正一

午後一時開始都城先づ攻勢を取る

一戦都軍の先峰皆本壘に枕を並ぶ濟軍町野^{L.F.}フライに危く逃れ林田四球に出で共に生還す

二戦二宮振し坂本^{C.F.}フライに命を拾ひしも島田の爲めに^{2.B.}に刺され大峯四球に出で^{2.B.}に進まん

として果さず^{2.B.}に歸る瞬間島田風の如き球を投て之を殺す其の美事さ云ふ可からず

三戦兩軍〇

四都軍不振濟軍三を入る、

五戦都軍の柳橋^{L.F.}ゴロにで冒檢能く効を奏し生還する事を得たりしは功一級濟軍振ひし事甚だ

しく島田^{C.F.}に快球を送り^{2.B.}を奪ひ佐藤^{S.S.}を破

り町野四球に尖本田^{2.B.}を破り徳富^{R.F.}ゴロにて

一周し然も尙ほワシヤウト島田又もやオバ^{S.S.}

にてベースを一掃す町野^{L.F.}フライを本田^{F.A.}

ウルを〇に得られて止む濟々得点十之に因て大勢定まる

六戰兩軍〇

七戰坂元四球に出で^{3.B.}迄辛き命を取り止めしが他の戰士の打ち死に殉死す濟軍島田佐藤町野皆な^{S.S.}に刺されて^{1.B.}迄走りぞん

八戰兩軍〇

九戰都軍棹尾の勇を振ふ元氣ありやなしや坂本^{P.}に死し大峯池田振死し万事止む

三振濟々三 都城七 四球濟々三 都城五

八代對大分

審判者 山田 説明

一戰大分先づ攻む兩軍見る可き者なし。

二戰淺川^{3.B.}を破で出しも後が續かず哀れ立往生八代打撃可成に振ひ二点を入る竹崎の^{L.F.}は

善し、

三戰岩下の^{C.L.F.}は快球紀古の^{S.S.B.}は能く岩下に生還せしむ八代軍の白瀬天山四球に川上^{R.F.}

に出で^{F.T.}ルベースたり將軍竹崎^{C.L.F.}を打ち三人を生還せしめしは此の日の花なり

四戰大分軍奮戦す或は四球に或は右に或左に打ちまくればさしもの八代軍も五人を入れたり八代軍不振、

五戰佐藤四球に出で尾渡の^{S.S.B.}の^{3.B.}のマイレクト三ヶ尻の^{R.C.F.}フライに由りて生還八代別に見る可き打撃なかりしかど敵のミスに由て三点を得

六戰大分軍〇八代軍一點を得元の^{F.A.}ウルストライキは不注意

七八戰双方不振せろ

九戰佐藤官費旅行無事歸國尾渡の^{S.S.B.}は最終の美岩下紀古の三振は最終の醜三振八代三分七 四球八代八大分四

柳河對師範

審判者 和田 信夫

午後三時半開始柳川先づ攻む

一戰石橋P.に助かり年少の森能くC.を破りしは大功師範の安田四球に出で生還す

二戰柳軍不振師範岡崎橋本の三振は面白からず

三戰永吉^{3.B.}を破て淺井のR.F.に生還す師範不振

四戰石橋森^{S.S.}のミス助かり吉田のゴロを又も^{S.S.}

が逸したるに乘じホームイン師範城^{S.S.} 2.B. デイルクトを破りしは美事師範一舉六點を得

五戰兩軍○

六戰柳軍不振師範打擊稍振ひ更に四點を加ふ

時に日漸く没しボールの不明を訴ふるに至りしかば審判者はドローンゲーム宣言せり

(五時二十分)

七戰四日午前八時より開始す師範柳川を凌ぐ事

實に五柳軍英氣を養ひ來て奮闘し敵の混乱に乗じて一舉六點得師範二點を得て差二

八戰師範の野次連大に活動し初めたり孤軍奮闘

せる柳軍少なからず引けし様に見られ只淺井官

費旅行に歸りしのみ之に反して敵は大舉五點を

得意氣揚々たり

九戰大勢既に定まる柳軍氣のみ急げども如何に

せん永吉^{1.B.}に死し吉田三振嶋添^{3.B.}にフライを呈して万事休す

三振師範四柳川五 四球師範五柳川七

熊本中學對宮崎

審判者 三好 泉

一戰宮崎先づ攻む小田黒木共に四球に出でしも

2.B.にCに刺さる熊軍松尾^{2.G.}に高橋江島^{3.G.}に出で生還

生還

二戰甲佐^{P.G.}に辛き命を助かる熊軍不振

三戰兩軍四球續出爲めに宮軍四、熊軍二を得二

四戰熊軍四球連發尙ほ止まず又も四點を與ふ熊軍も亦二點を得

五戰低氣尙ほ去らず又も四點熊軍○

六戰宮軍○村上^{3.G.}に出で一點を得

七戰四日午前八時より開始す

熊軍依然として振はず敵をして又も五點を得せ

しむ

八戰宮軍佐々木Bのミネにより一點を加ふ然も大勢を動かすに足らず

九戰宮軍○熊軍も皆本壘に憤死を遂ぐ

三振熊中六宮崎五 四球熊中十七宮崎五

第二日 (四日)

勝 負

商業(21)

豐津(5)

八代(32)

郡城()

柳川(4)

鎮西(1)

濟々(24)

大分(4)

熊中(25)

長崎(6)

師範(15)

八代(7)

午前十時開始

商業對豐津

審判者 和田 信夫

一戰商業先づ攻む實來御初より官費旅行豐軍の

立花も同様

三戰商軍一舉四點を得豐軍不振

三戰商軍不振安永川上豐軍四球を利して生還

四戰商軍二點を加ふ多田山中の三振は見苦し

豐軍○

五戰兩軍得點各一

六戰商軍大に奮ふ豐軍の乱れに乗じて八點を得

中山のFダイレクトは稍々可なり豐軍○

七戰兩軍○

八戰豐軍のPトコロデンを演じ敵をして四點を

得せしむ豐軍○

九戰兩軍○にて商業の勝ちに歸す

三振豐津八商業四四球豐津八商業十

長崎對熊本中學

審判者 飯田 亮

一戰熊中先づ攻む此の日長崎部署を變じて戦ふ

P山本未だ馴れざる爲め成績面白からず爲め

に五點を與ふ長軍不振

三戰熊中敵乱に乗じて六點を得長軍○

三戰兩軍○

四戰熊中可成に振ふ得點四長軍一を得

五戰兩軍至極平凡

六戰兩軍依然たり只石田のL.F. ヨロ稍々見る可し

七戰以然平凡攻守變換頗る迅速

八戰熊中得點二長崎一

九戰熊中更に四點を加ふ長軍○

三振長崎五熊中三 四球長崎八熊中九

濟々對大分

審判者 加藤 正一

此の日濟軍部署に移動あり町野退いてB.を守り

島田進でP.となり本田遠くC.に移る

一戰大分先づ攻む先鋒岩下B.にフライを呈し尾

渡P.G.に死す紀古G.に危く逃れ三ヶ尻淺川のR.F. ヨ

ロに無事生還す山内のF. フライに前二者立往生

濟軍先鋒町野林田四球を利し生還す

二戰奥川猛烈なるヨロをL.に送る林田之を取て

佐藤を2.B.に刺す岩下S.を破て出でしも尾渡の三

振に事終はる本田徳富G.に出でしも1.B.之を逸す

町野B.を破て前二者を生還せしむ

三戰島田四球を與ふる二爲めにフルルベースと

なる大分打撃振はず皆本壘門口に倒る尖本田猛

烈ヨロにB.を破つて出で徳富B.を破るに及で生

還す

四戰大分振はず皆な1.B.に死す濟軍大に振ふ島田

S.に失敬し尖L.F.フライに死せしが右に左に其の

虚を衝き一舉七點を得本田ヨロC.F.を破りしはあ

つぱれ

五戰淺川G.に逃れてB.にあり山内L.F. ヨロ松岡F.

ヨロを打つに及で生還す奥川B.に尾渡B.にサク

リファイスヒットをなして前二者を生還せしむ

六戰大分不振濟々一點を加ふ

七戰大分依然として振はず濟々又更に一點を加

ふ此にて濟々の得點凡て三十四大分四其の差二

十規約に因て濟々の勝

三振濟々一大分二 四球濟々七大分四

師範對八代

審判者 大村 一藏

一戰師範先づ攻む右田³.B.フライに死し安田¹.B.の本がに助かり城のP.F.エロに生還す八代軍先鋒山崎¹.F.マイシクトを打て一疊三疊を奪はんとしでならず田中中村皆フライアウト

二戰平凡師一八二を得

三戰師範の野次は又もや活動し初めたり八代軍引くる事大方ならず爲めに馬鹿な失策をなし四點を得せしむ八代不振

四戰野次は益々甚だしく審判者の宣告少しも聞こへず前回同様又三點を得せしむ八代更に振はす

五戰双方○審判者はドローンゲームを宣告す野次つて敵を引けしむ素より卑劣の行爲たり吾人は必ず師範の事なれば自ら悟て非を改むるならと想像せしに却て益々甚だしく言語同斷なる所爲に出で遂には本會運動部長より注意せらるゝ

に至りしかば係員は退場せしむべき嚴命を下せり

六戰(五時午前八時より開始)師範○八代一點を得

七戰八代昨日の負けに固くなりし様なり然も○の負傷の爲めに全軍憂色あり兩軍各一點を得八戰八代軍依然として振はず師範の野次も依然として靜らず發聲すべからざれば拍手すべしと云ふ馬鹿者生ずるに至れり師範一八代○九戰最後の會戰なり師範勝ちに乗じて又々四點を得八代如何に奮戰すればとて十一點の恢復到底六つかしく衰れ三點を限りとして盡きぬ根を残して退く

三振師範三八代八 四球師範五八代四

(以下次號)

しの原や霧にまかひてなく鹿の

聲がすかなる秋の夕ぐれ